

井崎市長の小田桐議員への反問

小田桐たかし議員の再質問における

「市長。私は自治体運営の努力は大いにやるべきだと思いますが、市長が良く口にされる都市間競争に勝つというのとは違うと思います。競争までして地方の人口を吸い上げて、地方都市が衰退したら日本国全体も冷え込み、それは必ず流山市民にも流山市のまちづくりにもしっぺ返しがあると指摘します。」

という発言に対して、井崎市長が反問権を行使して質問しました。以下に、そのやり取りを紹介します。

【井崎義治市長】

都市間競争では勝か負けるかで、中庸というのはありません。平均というのはないんですね。ですから、都市間競争で成果を出す以外にありません。そうしないと、市民ニーズ、あるいは議会からの要望に対してお応えすることはできません。小田桐議員は、都市間競争で勝つことを否定的に捉えているようですが、負けることを勧めているのですか。あるいは、その時の結果がどういうことになるか想定されていればお聞かせください。

【小田桐たかし議員】

私は都市間競争、都市どうしが競い合うということではないのではないかと考えています。競い合うことを何か駆り立てられるように、自分で錯覚するような行政手法、あるいは行政運営のやり方とかは時代に合わないと思っています。

流山市だけが人口がたくさん来て、もう国の動向によっては補助金が減ったり、交付金がなくなったりするわけですね。隣の柏市に勝ったから、勝つというのはどういうことを意味するのか。基本的にはいろいろ違うわけですね。柏市に勝ったから流山市は喜んでいるかといっても、柏市内にも当然親戚もいらっしやる市民もいるし家族もいるし、松戸市に勝ったからと言って何か流山が得するわけでもない。東葛圏内全体が、千葉県全体が流山市も含めて栄えることは求めますよ。でも、大きくは国で人口が大きく減っていくわけで「下りの美学」というか、そういうことも含めて私たち政治家はしっかり見ていかなくてはいけないし、いつまでたっても、自分の街だけが成長し続けることなんてありえない。

流山市も姉妹都市があります。姉妹都市のみなさんも、友好都市のみなさんも永続的に行政運営が出来るようなことも願いますし、流山市も、今住んでいる市民が何よりも安心してここに住み続けたいと思っていただけることが続くことが大事だと思います。何か都市間競争に負けて、そのことが流山市民に何か大きな影響を及ぼすかのようなことは、私は一政治家として、今の時代のニーズがわかっていないんじゃないかと思っています。

【井崎義治市長】

「下りの美学」という言葉はよくわかりませんが、それは置いておいて、都市間競争で勝

つ、負けるというのは結果であって、地方自治の中で創意工夫をして市民ニーズ、そしてまちの将来の発展のために策を打っていく、これの競争なんですね。このことが出来なければ共産党議員団から毎回何億円分もの要望があがってきますが、こういったものにもこたえられなくなるという風には考えられませんか。

【小田桐たかし議員】

140億円の小中併設校を造ってしまっ、また50億円の市民総合体育館、この市民総合体育館でいえば人口96万人の千葉市と、千葉市ポートアリーナと同じ規模ですよ。メインアリーナもサブアリーナも。17万、18万人そここの人口しかない流山市が千葉市と同じような規模の体育館つくって、これから将来にどうつなぐんですか。そういうことも含めて考えたら、あなたのやっていることは、自分の中で都市間競争というものを勝手に作りあげて勝っていると思っているだけなんです。柏市だって、松戸市だって、流山市だって、自分の身の丈というのがあるんです。それも考えずに、自分たちの打っている政策がまるで都市間競争に勝っているかのように思っているだけなんです。今の現瞬間なんですよ。首都圏につなぐ鉄道がとおりました。そのまわりに市の面積の5分の1の住宅開発やっていますよ。人口増えるんですよ。当たり前なんです。増えると思ったから「宅鉄法」で鉄道も通して大規模開発を導入したんですよ。まるで自分がマーケティングやって、それで来たと思っているだけなんです。そういう大きな国の形として流山市の今があるんですよ。いいですか。都市間競争やって流山市が勝ちました。松戸も柏も衰退しました。それで流山だけずっと繁栄し続けるんですか。繁栄し続ける保証はあるんですか。ないんですよ。ないんですよ、そんなの。今の現瞬間だけ見て、何か自分が都市間競争に勝つか負けるかって言ってますけど、そんなことやったって何があるんですか。行政の努力は必要ですよ。運営の努力は。それは市民のニーズにどう応えるかということですよ。でも、あなたのニーズの把握は、平成20年度に市民意識調査をやっただけでしょうよ。今、満足度達成調査だけでしょうよ、窓口業務とか。いいですか、市民のニーズの把握というのは平成20年度以外やっていないでしょう。どんな施設が必要なのか、どんなこと市民が願っているのか。そういうものも含めて、私は今あなたがやっている都市間競争というやり方、人口が増えている、マーケティングが当たっていると思っているのは、今のこの瞬間しか思っていないんじゃないのという立場で思っているんですけどね。

【井崎義治市長】

冒頭に申し上げた通り、流山市は13年～14年前、少子高齢化で人口が減少する年もありました。そうした中で、少子高齢化を脱して市民ニーズとまちの将来的な発展を確保するために沿線開発も含めて様々な手を打って、そういう工夫をしてきました。要望を様々な中で沿線開発にも当初から一貫して反対されてきたことについて、歳入確保ということについて、歳出に対する要望は沢山いただけてきました。歳入確保についてご意見をいただいた記憶はほとんどありませんので、そういう点では、見解の相違かと思い、これ以上の質問は差し控えます。